

会報 平成おやじの会

No.118

「おやじの会十周年に寄せて」

—創設メンバー 奥井 康広さんから—



まだ十年？もう十年？ 受け取り方は様々でしょうが、設立時から「おやじの会」の活動を見守ってきた私にとっても感慨深いものがあります。そして、何より、これまでの活動を支えてきたおやじ達の熱意・情熱に改めて敬意を表します。

思い起こせば、「おやじの会」の産みの親はPTAでした。準備期間や設立当初はPTA役員会の中で毎回議題や連絡として話題となり牧会長、石川会長のみならず役員のお母さん方も含めて強いバックアップ体制が組まれていました。PTAの「一委員会」として活動予算を組んでは？という思惑もあったのですが、おやじ達は予算・規約などを整備し独立した「組織」として「自立」する道を選んだのでした。『琴中おやじの会ここにあり』を示したこの時の気概は現在も「会運営の心の柱」として受け継がれています。

「無理せず、参加できる人が参加できる時に」とか「おやじ自身が楽しむために」「友達の輪を広げよう」など柔軟なスローガンでの活動ですが、決して「なあなあ主義」「形式主義」に陥ることなく、「正論」を含め徹底した議論による運営がありました。毎年の「総会」然り、グループメール（こやじネット）上での「規約論争」「おやじの会の花壇論争」なども思い出します。

様々な活動が行われましたが、他の「おやじの会」の追随を許さないのが「広報活動」や「活動集約」でしょう。今年度100号を迎えた「会報平成おやじの会」や今年10号になる会誌「柏葉」、充実した「ホームページ」が活動の一つひとつを、参加者の一人ひとりの思いを映像を交えて積み残してくれました。牛田さんをはじめ広報担当の皆さんや歴代会長・副会長さん達のご苦勞に感謝します。これらを読めば10年間の活動の重み・大きさが実感できるのです。

PR活動もありました。「新聞」「地域のコミ誌」などに取り上げてもらったこともありました。山本さん経由で『ほっかいどう政策研究13号』の「子どもの教育に果たす地域の役割」という特集に、牛田さん文責による「琴中おやじの会」の発足の経緯から目的・活動の概要紹介などをまとめた論文が掲載されました。この論文も貴重な財産です。

「学校」との距離感もほどよいのだと思います。「開かれた学校」と言われますが、この距離感がポイントになるはず。会長が変わったから、事務局担当の先生が変わったから、校長が変わったから、子どもが卒業したから、単身赴任になったからなど、どの項目も乗り越え、今年もまた「入学式後」の「おやじの会紹介」から活動が始まることに再度敬意を表し、これからも「琴中おやじの会」らしさを紡いでいくことを願っています。

無理せず、参加できる人が参加できる時に